

Press Release 2023 年 6 月 8 日

昨年大反響を呼んだ
“カンボジア内戦を生き抜いた日本定住カンボジア家族の物語と記憶”
内容を充実させて再開催！

キム・ハク「生きる IV」写真展（神奈川県・横浜市）
書籍再版&パブリックプログラム



キム・ハク《刺繍レースの布とカンボジアの絹緋の巻きスカート（ソック・ボーン／1965年タケオ州生まれ、神奈川県在住）》「生きる」プロジェクトより

キム・ハクの写真は記憶をたどる旅である。その旅は苦しみを呼び覚ましながらも、深い寛容と優しさに満ちている。

ーリティ・パン（『生きる III』序文より）ー

2022年8月から9月にかけて、東京・南青山「スパイラルガーデン」と、神奈川県・黄金町「高架下スタジオ Site-A ギャラリー」で開催した、カンボジアのアーティスト キム・ハクによる写真展「生きる IV」。1970年代からのカンボジアの内戦を逃れ日本に暮らすカンボジア人々の人々の所持品を撮影した写真と文章による作品約40点は、暗い過去に埋もれた個人の物語に光を当て、歴史を生き抜いた人間のたくましさや希望の力、未来へつなぐ重要性ときっかけを見る人に強烈に提示し、大きな反響を呼びました。

この昨年の反響を受け、今年はカンボジア・プノンペンを拠点に活動するキュレーターのメタ・モエンを迎え未発表の作品を加えた写真展を開催。またカンボジア内戦を生き抜い

キム・ハク「生きる IV」写真展
書籍再版&パブリックプログラム

Press Release 2023年6月8日

た家族の実情により深く触れることのできるパブリックプログラム、書籍の再販も行うなど、パワーアップした企画として戻ってきます。

主催する任意団体である「Alive」は、昨年開催されたキム・ハク「生きるIV」展をきっかけに、カンボジアにルーツを持つ異なる世代背景の女性3名により結成されました。日本に住むカンボジアにルーツを持つ人々が「自分らしさ」を大事にすること、またカンボジアから難民として移住してきた人々やその家族のウェルビーイングについて考え、当事者の視点でサポート活動をリードすることを目的にしています。

「Alive」と協力のニュージーランドの公益財団法人「Rei Foundation Limited」は、この開催を通じて、参加者が日本社会における難民の実状や平和・紛争について考察し、地球市民としての問題意識を持ち、日本社会の多様性の現在地ひいては多様性を基盤にする社会の強さについて知る機会となることを願っています。

未来に向けて本当の多様性とは何か。日本在住の全世代のカンボジアルーツの人々や訪れた観客を含むすべての人が自分たちのアイデンティティを再発見し、誇りに思える機会になれば幸いです。

また本展の後は、カンボジアのプノンペンでこれに続く展覧会（会期2023年8月19日から9月2日）を開催予定です。

会場：Sosoro Museum <http://sosoro.nbc.org.kh/>



キム・ハク「生きるIV」展示風景 2022年 会場：スパイラルガーデン
撮影：木奥恵三

開催概要

展覧会タイトル

キム・ハク「生きる IV」

キュレーター メタ・モエン

会場

期間：2023年6月24日（土）～7月9日（日）10:00-19:00

Press Release 2023 年 6 月 8 日

※ただし非公開パブリックプログラム開催時（7月2日（日）13:00-18:00）は観覧を一時
休止します。詳しくは展覧会ウェブページをご覧ください。

会場：YOKOHAMA COAST ROOM3
神奈川県横浜市西区高島 2-14-9 アソビル
TEL. 045-594-7314

料金：無料

展覧会ウェブページ：

https://www.facebook.com/KimHak.Alive4/about_contact_and_basic_info

パブリック・プログラム

●6月24日（土）15:00-17:00 一般公開

「セッション1：現代アートと文化：カンボジア内戦後の新しいイメージとインスピレーションの構築」

スピーカー：キム・ハク（本展アーティスト）、メタ・モエン(キュレーター)、ダネット・サン(ドキュメンタリー映像作家)、リノ・ブット(アートコレクティブ Sa Sa Arts ※オンライン参加)、スオン・ソクロ(考古学者、教授 ※オンライン参加)

各スピーカーが、これまでの活動や戦後のカンボジアにおける新しいイメージの創造と重要な着想のための役割について話します。

●6月25日（日）12:00-18:00 一般公開

「セッション2：生きる IV 作品の対話型鑑賞：日本社会の課題・個人の体験について」

「生きる IV」からいくつかの作品を選び、見て感じて連想したこと、考えたことなど鑑賞者同士の「気づき」の輪を、対話を通して広げていきます。

●7月1日（土）11:00-13:00 一般公開

「セッション3：カンボジア難民の人生の後期と家族の関わり～自分らしく老年期を過ごすための模索～」

カンボジアルーツをもつ 1.5 世代は親の決断や母国で余生を過ごしたいなどの思いをどのように引き受けたのか、またそれに伴う悩み、生活費や医療問題、さまざまな障壁などについてインタビュー動画やアンケート集計資料などを紹介し、環境改善の糸口を探ります。

●7月9日（日）13:00-15:00 一般公開

「セッション4：異文化社会における知的文化財の保護と継承・発展」

10代で来日した方が目の当たりにした当初のコミュニティの様子をヒアリングし、文化伝承に至る思いを聞きながら、第1世代と1.5世代の対話セッションを行います。またフランスの文化伝承の事例を紹介しながら日本でできることを考えます。

パブリック・プログラム申し込み方法

下記あるいは右の QR コードよりお申込みください。

<https://forms.gle/bTCgM7PeXVEvc1Bd8>



申込書

Press Release 2023 年 6 月 8 日

公式アカウント

<https://www.facebook.com/KimHak.Alive4/>

<https://www.instagram.com/kimhakaliveiv/>

一般のお客様お問合せ先

alive.jp2023@gmail.com

主催：Alive

協力：Rei Foundation Limited

● 『生きる IV』書籍 再販

2022 年に制作したアーティスト・ブック『生きる IV』
（日本語・クメール語併記）。新たに撮影された 4 人の
エピソードを加えさらに充実した内容の第二版の販売を
開始します。

日本で制作した生きる IV の作品全点とそのテキストの
ほか、キム・ハクとの対談、カンボジア にルーツを
持つ人々へのインタビュー、研究者の論考などを掲載し
ています。

金額 5,000 円(税込)



キム・ハク「生きる IV」シリーズ について

1970 年代のカンボジアでは、クメール・ルージュ政権下の圧政と虐殺、戦争を逃れて大勢
のカンボジア人が国外への脱出を余儀なくされました。彼らは家を出るときほんのわずかな
持ち物しか持ち出せず、最も貴重なもの、あるいは最も実用的なものだけを手に、故郷
を去りました。

1981 年生まれのキム・ハクは、自分の親世代に起きたこの史実と個人の記憶に関心を持ち
ました。そしてクメール・ルージュ時代を生き延びた人びとを訪ね、彼らの持ち物とその
物語を記録するプロジェクト「生きる」を 2014 年から始めます。両親へのインタビュー
から始まった「生きる」は、その後、ブリスベン（オーストラリア・2015）の第 2 章、オ
ークランド（ニュージーランド・2018）の第 3 章へと展開し、個人が抱えていた過去の記
憶を世代を超えて語り合う対話のきっかけを生み出しました。

2020 年キム・ハクは国際交流基金アジアセンターのフェローシップを受けて来日し、神奈
川県を中心にカンボジアにルーツを持つ人々と出会い、作品を制作。「生きる」の第 4 章
となる「生きる IV」は、1970 年代のカンボジア国内の混乱によって国に戻れなくなった
留学生や、1980 年代に日本へ渡った難民を含む 12 組のカンボジアの家族の物語を中心に
構成されました。

Press Release 2023年6月8日

腕時計、家族の写真、片割れのピアスなどの所持品は、遠い故郷と新しい土地での思い出が凝縮した記憶の器です。キム・ハクは、当時を経験した人びとを訪ね、時間をかけて一人一人の物語を聞き取り、その物語を写真とテキストで記録しました。黒い背景に凜として浮かびあがる所持品の写真を通して、暗い過去に埋もれた個人の物語に光を当て、歴史を生き抜いた人間のたくましさや希望の力を、静かに力強く映し出しました。

アーティスト・ステイトメント

私はこの長期プロジェクト「生きる」を、私自身の家族の記憶から始めました。そこからカンボジア国内に住む他の家族、そして紛争後に祖国を離れて世界各地で暮らすカンボジア人ディアスポラにも、このプロジェクトを広げて人類の歴史を記憶していくことにしました。そして今、生きた証人は徐々に姿を消し、時間との戦いになっています。クメール・ルージュの戦争から40年経ち、当時を知る人々も高齢になり、残された時間も少なくなってきました。戦争を体験した証人が記録されないまま亡くなってしまえば、その記憶は失われてしまいます。過去から学ばなければ私たちは過ちを繰り返すことになり、これはカンボジア人だけでなく、全人類にとって重要なことだと考えます。私の写真に登場するモノの多くは、戦前、クメール・ルージュ政権時代、国境のキャンプで家族によって使われ、その後、犠牲者や生存者と共に新しい土地へ長い旅をして日用品として使われ続けてきたものです。それぞれの写真には、個々のモノにまつわる真実の物語につながるヒントが隠されています。ポル・ポト時代の後、汚れた土地から掘り起こされ、再生され、あるいは、家族の生涯を通じて保管されてきたモノなのです。写真やモノはすべて、深い意味をもっています。それらは、歴史の中の過去の時間の証拠です。戦争は犠牲者を殺すことは出来ても、生き残った人々の記憶を殺すことはできないのです。記憶は、現代に生きる人々の意識の中で生き続け、知られ、共有されるべきであり、次の世代のために遺産を保存する必要があるのです。 —キム・ハク—

プロフィール

アーティスト キム・ハク (1981年生まれ)

カンボジアの北西部に位置するバタンバン市出身。

クメール・ルージュ政権崩壊の2年後に生まれ、両親から当時の記憶を聞いて育つ。クメール・ルージュ政権前後のカンボジアの社会史を記憶・再生・再解釈するプロジェクト「生きる」をはじめ、土地や建物の記憶や変化する祖国の風景を撮影して記録し、カンボジアの政治的文化的構造に関連するテーマを探求している。

これまで東南アジア、中央アジア、ヨーロッパ、オセアニア、アメリカで個展を行うほか、世界各地の国際写真フェスティバルや展覧会にも多数参加。「生きる」はカンボジア、オーストラリア、ニュージーランドで制作展示され、アジア、ヨーロッパ、アメリカの都市で紹介されている。

主な展覧会：Photo Quai (パリ、フランス/2011)、World Event Young Artists (ノッティングダム、UK/2012)、OFF_festival Bratislava (ブラチスラバ、スロバキア/2014)、国



Credit: Sonny Thakur

Press Release 2023年6月8日

際写真フェスティバル（シンガポール/2012）、国際マルチメディア・アートフェスティバル（ヤンゴン、ミャンマー/2012）、ASEAN Eye Culture（バンコク、タイ/2014）、フォト・プノンペン（プノンペン、カンボジア/2015, 2017）、アンコール・フォトフェスティバル（シェムリアップ、カンボジア/2014）、フォト・サンジェルマン（パリ、フランス/2017）、オークランド写真フェスティバル（オークランド、ニュージーランド/2017）、第二回フォト・カトマンドゥ（カトマンドゥ、ネパール/2016）ほか多数。ケ・ブランリー美術館「レジデンスプログラム賞」（パリ、フランス/2011）、「ストリームフォト・アジア」2位（バンコク、タイ/2012）、The Advisor 紙「Best of Phnom Penh」ベストアーティスト（プノンペン、カンボジア/2012）。写真集に『UNITY』（2013）、『生きる III』（2018）がある。「生きる III」はオークランド戦争記念博物館に所蔵された。 <https://www.kimhak.com/biography/>

キュレーター メタ・モエン

カンボジアの現代美術に取り組むインディペンデント・キュレーターで、アーティストのためのプラットフォーム作り、観客やアートコレクターの育成に関心を持ち活動を行う。アーティストとのコラボレーションや対話によってキュレーションを組み立てる。Uncommon Pursuits, San Art, Saigon, Vietnam（2018）、The Curators Academy, The Goethe- Institute Singapore and TheatreWorks, Singapore（2018）、そして Afterall と Southeast of Now が招集した「Terms and Conditions of Writing and Publishing Art in Southeast Asia」（2021）などのキュレータープログラムに選ばれている。シェムリアップの Treeline Gallery では、カンボジアの新進アーティストとの新しいコミッションのキュレーションとマネージメントを行う。カンボジア現代アートアーカイブスの構築に焦点を当てたアトリソースホームである dambaul（プノンペン、2019年）と、ネットワーク構築と観客開発に焦点を当てた独立したアートスペースである Kon Len Khnhom（プノンペン、2017年）の2つの実験的なコミュニティスペースの創設者であり、以前は Java でクリエイティブ・ジェネレーションのクリエイティブ・プロデューサー（2017-2018年）と、SA SA BASSAC でコミュニティ・プロジェクト・マネージャーを務めた（2013-2016）。

Rei Foundation Limited について



Rei Foundation Limited は、すべての人のウェルビーイングを育む世界というビジョンを持って、2012年に公益法人としてニュージーランドに設立されました。個人とコミュニティがそれぞれについて、またお互いの価値を理解し認めることのできる社会、多様性を尊重し、多様性こそがそれぞれの社会を強靱にするものであると考えることのできる社会に向けたプロジェクトの支援に重点を置いています。ニュージーランド、日本、トンガ、マ

Press Release 2023 年 6 月 8 日

ラウイ、カンボジアで活動するさまざまなパートナーと連携し、ポジティブな社会変革の促進に従事しています。

私たちとキム・ハク氏の作品との出会いは 2017 年にニュージーランドで開催されたフォトグラフィーフェスティバルでした。そしてこのフェスティバルの一部として展示されていた同氏の「生きる」プロジェクトの作品が訴えかけるメッセージが、国や、文化、習慣、人種といった枠組みを超えて人々を強く結びつける力を持っていると考えました。

翌年よりキム・ハク氏と共にニュージーランドのカンボジア移民コミュニティについての「生きる」第 3 章の制作を進め、その作品はオークランドとプノンペンで、また書籍として発表されました。現在同作品はオークランド戦争記念博物館によってオークランド市民に関する重要な資料として、次世代のために大切に保管されています。

<https://reifoundation.com/> <https://www.facebook.com/reifoundation>

任意団体「Alive」について

任意団体である「Alive」は、昨年開催された KimHak 「生きるIV」展をきっかけに、カンボジアにルーツを持つ異なる世代背景の女性 3 名により結成されました。日本に住むカンボジアにルーツを持つ人々が「自分らしさ」を大事にすること、またカンボジアから難民として移住してきた人々やその家族のウェルビーイングについて考え、当事者の視点でサポート活動をリードすることを目的にしています。

【参考】クメール・ルージュ政権と日本へ来たカンボジアの人々

1975 年から 1979 年にかけてカンボジアを支配したポル・ポト率いる「クメール・ルージュ」政権下では、自国民の大量虐殺や飢餓病気などでたくさんの人々が命を落としました。国内の混乱や戦争から逃れようと大勢のカンボジア人が国外へ脱出し、彼らはベトナム・ラオスの難民とともにインドシナ難民と総称され、アジアの難民キャンプを経て、あるいは小船で脱出して世界各国へ移り新しい生活を始めました。

日本は 1978 年からインドシナ難民の受け入れを開始し、2005 年に終了するまでに約 1300 人のカンボジア人を含む合計 11,319 人のインドシナ難民を受け入れました。（難民事業本部作成資料より）兵庫県姫路市と神奈川県大和市の 2 箇所にできた定住促進センターでは、日本の暮らしに馴染めるように、日本語教育、社会生活適応指導、職業の斡旋紹介などの定住支援を行いました。現在、1980 年代に日本へ渡った第 1 世代と第 2、第 3 世代を含む約 2000 人のカンボジア・ルーツの人々が日本に定住しています。（2021 年法務省在留外国人統計より）

本件に関するプレスのお問い合わせ

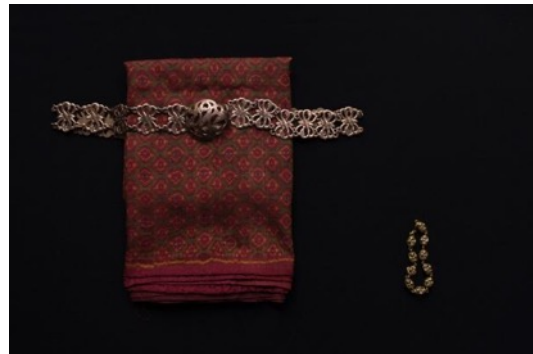
Tel: 090-2062-6963 E-mail: info@relayrelay.net 西谷枝里子（リレーリレーLLP）

Press Release 2023 年 6 月 8 日

その他の広報画像



1



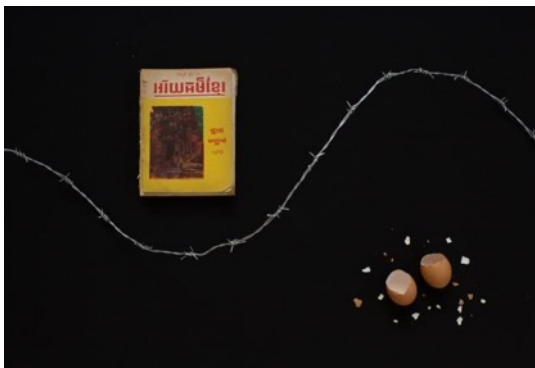
2



3



4



5



6

画像掲載時は下線部分の作家名と作品タイトルを記載してください。文章は、被写体のエピソードです。

1. キム・ハク《300本の昔の歌のカセットテープ（ソック・ポーン／1965年バツタンバン生まれ、神奈川県在住）》
「生きる」プロジェクトより

ソック・ポーンはカオイダン・キャンプで結婚した後、チョンブリ・キャンプへ移り、日本への渡航前にしばらく暮らしていた。そこで彼女の夫は歌の入ったカセットテープを売る商売をしていた。タイ国内ではクメールの昔の歌が入ったカセットが買えたので、彼はキャンプの外へ出てカセットを仕入れ、コピーしてキャンプで売った。カセット1本が15タイ・バーツ。アメリカ、カナダ、フランス、オーストラリアなど、第三国への出国をひかえた難民たちがよく買いに来た。1987年、日本での生活が許可されたという通知を受けて、夫はこの仕事を続けようと300本のカセットを日本へ運んだ。しかし思い通りにはいかなかった。来日して周囲の環境が変わり、以前カセットを買っていたカンボジアの難民たちはクメールの歌を聴かなくなった。結局、彼はこの商売を断念した。それでも夫婦はこの300本のカセットテープを捨てずに保管している。

2. キム・ハク《14Kローズゴールドのベルト、サンボット・ホール、金のダングル・ブレスレット
（諏訪井セタリン[ペン・セタリン]/1954年ブノンペン生まれ、東京都在住）》「生きる」プロジェクトより

キム・ハク「生きる IV」写真展 書籍再版&パブリックプログラム

Press Release 2023年6月8日

セタリンが16歳になった時、折々の特別な機会に身に付けられるようにと、母親がローズゴールドのベルトと金のブレスレットをくれた。彼女は若い時からこれを身に付けていて、日本へ留学する時も持ってきた。カンボジアの文化を日本人に伝えるために、今も大切な機会に身に付けている。(*サンボット・ホールとは、女性が正装として着用する絹緋のロング丈の巻スカート)

3. キム・ハク《学習帳と刺繍レースのブラウス（サム・ソン／1956年カンボット生まれ、神奈川県在住）》「生きる」プロジェクトより

クメール・ルージュ時代前夜、サム・ソンはバタンバン州で立って屋になる勉強をしていた。戦争によってそれが生業になることはなかったが、自分が習ったことをよく覚えている。彼女はクメール・ルージュ時代の間もつねにノートを持ち歩いていた。難民キャンプではノートがなかったので、彼女の夫は英語を学ぶ時、このノートを使って上から文字を書いた。彼女はそのノートを日本へも一緒に持ってきた。日本に来て初めてサム・ソンは刺繍レースのブラウスを3着作った。

4. キム・ハク《思い出の本（楠木立成[ロス・リアセイ]／1960年ブノンペン生まれ、神奈川県在住）》「生きる」プロジェクトより

1989年、サイト2という難民キャンプで暮らしていた時、リアセイは思い出を本にまとめた。それは非常に深い意味を持っていた。難民キャンプの生活は苦楽を共にした場所で、たまに砲撃があると、皆そろって防空壕に逃げ込んだ。友達との思い出がたくさんある場所だった。

「この本をまとめたのは、故郷を離れた私たちがさまざまな感情を抱えながら暮らしていたからだ。キャンプで出会った仲間が自分の気持ちを表現できるように、互いに忘れないでいられるように、ひとりひとりの写真を貼った。友人たちとは皆別れて違う国で暮らしているが、時々懐かしくなるとこの本を読み返すという。「この本を読むとたくさんの思い出がよみがえる」とリアセイは語った。リアセイは世界各地にいる旧友を訪ねて再会した。

5. キム・ハク《本と難民キャンプ（楠木立成[ロス・リアセイ]／1960年ブノンペン生まれ、神奈川県在住）》「生きる」プロジェクトより

1981年、市警で働いていたリアセイは結婚し、ふたりの娘を授かった。まだ娘たちは幼かったため、難民キャンプへ逃げることは辛い決断だった。

1985年、リアセイは難民キャンプへ案内するブローカーへ渡すカネを得るために、テープレコーダー、妻のゴールドのイヤリングといったいくつかの物をこっそり売り、妻とまだ幼かったふたりの娘を置いて密かに逃亡した。ポロボロの服に身を包み、バタンバン州へ向かう列車にブローカーと乗り込んだ。次に車でスヴァイへ行き、徒歩で移動を続けた。クメール・ルージュ軍とベトナム軍から逃げながら、ダンレク山脈を目指した。多くの困難を乗り越えて、彼はキャンプ07に到着し、母と兄に会った。このキャンプでは女性にのみ食糧等の配給を行っていたので、そのことは一家を苦しめた。彼の母には息子が3人もいたからである。配給を受けるために彼の弟は女性のふりをした。運悪く弟は時々捕まっては殴られ虐待を受けた。リアセイは読書が好きで、ブノンペンから難民キャンプへ逃亡する時、3冊の本を持ってきた。『カンボジアの文明』、『カンボジアの伝統的な遊び』、そして『カンボジア詩の創作法』である。退屈な時に読むつもりだった。

6. キム・ハク《幼少時の火傷の痕とトウガラシ（萩原カンナ[チアンセン・テアッケナー]／1970年ブノンペン生まれ、神奈川県在住）》「生きる」プロジェクトより

テアッケナーがブノンペンを出発して他人と一緒に暮らしていた時、熱湯で火傷をした。その時の痕が今もうすく残っている。もう消えかかっているが、その火傷を負った時の光景は、いつもありありと目に浮かぶ。

母親と離れて暮らしていた時、テアッケナーは空腹過ぎて、トウガラシをこっそりもいで食べた。辛いと感じたが、空腹のあまり辛さに耐えながらそれでも食べたのだった。